



佐山小学校運動場



水没する御牧村



ボートで救出される中島の人々



土のうでふさがれる宇治川堤防決壊口



水びたしになった市田

28年の水害から学ぶ

久御山町は山城盆地の中で最も低いところに位置し、町の北西部を宇治川が西流し、南には木津川が北西に流れています。さらには宇治市、城陽市などの上流部から下流する水を集め、町の東部を北流する古川の水が東一口に集まることから、内水を排除する治水対策は町の最重点課題となっています。



巨椋池排水機場

昭和28年の水害以降、河川改修や堤防の強化に併せ、内水排除対策が着々と進められています。

市街地からの内水を古川や宇治川に強制的にポンプにより排水する施設として、昭和48年には久御山排水機場（東一口）が、同53年には久御山町佐山排水機場（佐山）が完成。

そして、広大な巨椋池の排水を担う現巨椋池排水機場が機能強化され平成17年度に本格稼働しました。

〈表〉台風13号の被害状況

	御牧村	佐山村
被災者数	3,478人	3,044人
負傷者	10人	13人
家屋全壊	53戸	7戸
家屋半壊	102戸	91戸
床上浸水	337戸	327戸
床下浸水	59戸	153戸
田畑の流失	1,200a	—
田畑の冠水	36,760a	38,800a
道路決壊	45ヵ所	7ヵ所
橋梁流失	11ヵ所	6ヵ所
損害見込額	12億9,785万円	3億8,706万円

〔昭和28年災害の記録と防災のてびきより〕

特に台風13号による水害は、「巨椋池の再現」とまでいわれ、資料〈表〉の被害状況にみるように、町全域が壊滅的に被災するといった大惨事となりました。しかし、幸いなことに死者は出ず、人的な被害も最小限に食い止めることができました。この水害のとき冷静に行動したのは、明治期の洪水を経験した高齢者たちであったと言われてます。初めて経験する洪水に慌てふためく若者を制し、この状況であれば浸水するまでに十分な時間がある。まず家財を2階に上げ、次に握り飯を用意させるなどの確な判断と指示を与えて避難した例は数えきれないほどあったと言います。まさに「先人から伝えられた生

先人の知恵が大惨事を最小限に食い止めた

町の歴史を振り返ってみると、明治時代の40年間だけで、堤防が決壊し家屋まで被害を及ぼした洪水は9回を数えます。これらの水害を教訓に木津川や宇治川の改修が継続的に行われ、両河川は明治・大正期にかけて現在の流れに付け替えられ、また、天ヶ瀬ダム・高山ダムの建設などによって洪水災害は解消されつつあります。

本年は、昭和28年（1953年）8月、京都府南部に大きな被害をもたらした南山城水害や翌月の台風13号の洪水から69年を迎えます。私たちの町にとって、

活の知恵」がなせるわざといえるでしょう。28年の水害から早69年が経過し、この間、堤防の強化や内水排除の機能強化などの対策によって、水害に対する備えは飛躍的に改善されてきました。しかし、平成30年の西日本豪雨のように予想をはるかに上回る集中豪雨などによる危険が解消されたわけではありません。69年前の記憶を風化させることなく、28年の大水害を振り返り、今一度、万が一の災害に備えましょう。

町全域が水没 低地であるがゆえに長期の避難生活

昭和28年9月16日、トラック島付近で発生した熱帯性低気圧は勢力を増し、台風13号となりました。25日午後3時には中心気圧930hpa、最大風速50m/sの猛台風となりました。

久御山では、24日午前7時から翌25日午後6時までの連続雨量は217mmを記録。台風による風雨は、25日の午後7時ごろには衰えましたが、木津川、淀川は危険水位を突破。木津川の堤防では消防団などによる土のう積み身が身を挺して行われ、決壊はまぬがれました。

ところが、淀川の満水により木津川、桂川が宇治川へ逆流をはじめ、25日午後9時30分に宇治川左岸（現在の伏見区向島大黒付近）が決壊し、御牧、佐山両村は水没しました。当時の御牧村の記録では「本村は管内最低地にあるため、水深5mにして全村殆ど床上浸水の状態になり、暗黒の深夜子を呼び、親を尋ね救いを求める悲痛な叫び声は、今も耳に残って消えないのであります」とされています。

避難の状況は、大久保小学校、小倉小学校、明親小学校などに分宿。逃げ遅れた人が屋根の上で救出を求める姿が各所でみられました。翌26日、宇治保安隊、伊丹・枚方両駐屯部隊など約350人が鉄舟に乗って、逃げ遅れて孤立している住民の救出作業を行いました。その後、避難所生活は2週間近くも続いたと言います。

二十六日午前零時現在で旧巨椋池七百町歩をなめた宇治川の本流は同十時現在刻々と拡大、千五百町歩に達し、付近一帯は一大湖水を現出した。このため久世郡御牧村西一口、森、野村、島田の各部落をはじめ佐山村の一部では屋根のみを見せ、屋上で救援を求め人たちが各所に見られ、このため保安隊、宇治駐とん部隊では舟艇を出動させ救助作業に当たっている。
〔京都〕昭和二八・九・二七
〔大毎〕昭和二八・九・二七

御牧、佐山両村内の最大浸水深は、9月25日午後9時30分の決壊から約14時間後の翌26日午前11時の時点で記録されています。浸水の深さは、佐山村の市田で2.7m、佐古・林が2.1m、佐山・田井が1.8m、下津屋は1.2mで御牧村の低地では5m以上に及んでいます。また、水が完全に引くまでに低地では約1か月を要したと言います。

これらの状況を当時の新聞は上記のように伝えています。

被害状況

ほぼ全住民が被災したにもかかわらず、死者が出ず、かつ人的被害を最小限に食い止められたのは、浸水の状況が緩慢であったことと、避難が迅速であったことによるものとされています。〈表〉

過去の水害を教訓としましょう

今回お知らせしました洪水浸水想定区域図は、想定しうる最大規模の雨が集中して降ったと仮定し、宇治川で360mm/24時間、木津川で358mm/12時間、桂川で341mm/12時間の雨量を想定したもので、これらは年間雨量のおよそ4分の1に相当します。

雨量は異なりますが、昭和28年の水害の最大浸水深と今回の浸水想定図の最大浸水深を比較すると概ね一致しており、今回の想定雨量で、もし、宇治川や木津川の堤防が決壊した場合、同様の浸水状態となることが予測されます。

本町は地理的に低地にあることから、全域が浸水する事態を避けることができないことを念頭に置いていただき、万一の洪水に備え、過去の水害を教訓に迅速な避難行動を日頃から心がけましょう。